宮古圏域の「著書・論考」をたずねて（補遺）　後編

仲宗根　將二

第三部　組織の動向

1．宮高十期生「卒業四〇年記念誌〈しおり〉」

宮古高校十期卒（一九三九・四～四〇・三の生れ）による『卒業四〇周年記念誌〈しおり〉』が、このほど発行された。巻頭に、同期生会長安谷屋豪一、在沖同会長立津皖司の両人が、「発行のことば」を記している。それによると昨年六月、卒業後四十年ぶりに「記念の集い」を催したが、同期二二四人のうち物故者十八人、およそ半数の九八人が全国各地から参集した由。小・中・高校長はじめ、大学教授、会社社長、医師、弁護士、公務員、日赤本社広報室主幹など多彩。「集い」では、ゴルフ、グランドゴルフ、囲碁大会等で親睦を深めたほか、記念植樹、人材育成基金ならびに緑化推進基金を贈呈、博物館見学など島内一周観光をしている。

「記念誌」には各催しのスナップのほか、二七人が寄稿している。愛す島や脱皮る島・砂川隆久、雑感・鉢嶺弘、「故郷の文化」考・伊佐之男、「ふるさとは…」松川昇、六十年を振り返って・吉村拓、定年未定の道・宮里邦雄、我が人生の一一〇〇日・譜久島昇、その一・その二・その三・そして…・下地恵二、故洲鎌清晃君を悼む・関口英雄、思いつくままに・宮沢盛文、ある出会い・石原健一、或る男の半世記・比嘉騏一郎、南校舎一年Ｅ組・仲元浩一、「島いろ心」から十二年・下地廣、港の色と音・松永邦夫、アグは人を育てる・宮長勇栄、アグたちに乾杯・豊島蓉子、「卒業四十年の集い」に参加して・与儀勢子、同期会余談、平川孝子、別にどうってことはないのだが…・池間功、同期回顧・佐和田豊三、年紡ぐ・照屋ヨシ子、雑感・平良光子、「みいどぅかなっさ」「たつどぅかなっさ」花城愛子、わが家の近況報告・富山裕作、きょうはヒマなので“旅”についてルル語ってみようかなと・仲間綱雄、卒業四十年記念の集い・平良賀栄。Ａ四判。九二頁、池間功、真栄城宏、安谷屋豪一ら三人による編集、非売品。

2．沖縄県立宮古高等女学校　跡地之碑

宮古高等学校は、一九九八年十一月二十日、同校野球場（旧県立宮古高等女学校跡地）の一角に「沖縄県立宮古高等女学校　宮古女子高等学校　跡地之碑」を建立、除幕した。創立七十周年記念事業の一環として建立したもの。戦後同校に統合された女学校卒業生の永年の願いをかなえたもので、宮古高校同窓会（南秀会）に所属しつつもなお、別途に組織を維持している「宮高女同窓会」を感激させている。

明けて一月十八日、宮高女同窓会は県内各地から会員二百余人が参集、午前中は母校の「跡地之碑」で対面式、午後は市内下里のホテルで祝賀会を催し、母校が宮古高校に統合されて四十四年ぶりの碑建立をよろこびあっていた。

ところで同碑裏面には、左横書きで、三つの事項が記されている。

「昭和一一年三月二〇日　沖縄県立宮古高等女学校創立」「昭和二三年四月一日　沖縄県立宮古女子高等学校と改称」「昭和二九年七月一日　沖縄県立宮古高等学校に統合」である。末尾は「宮古高等学校創立七〇周年記念事業　平成一〇年一一月一六日　建立」となっている。宮高女「創立五十周年記念誌」（一九八六年）は、昭和二十三年四月の校名改称についてはたんに「宮古女子高等学校」、昭和二十九年七月は「宮古高等学校と宮古女子高等学校とを合併し、男女共学の宮古高等学校となる」と記している。実際は、戦後の米軍全面占領下であり、本土からは分断され、沖縄県も存在しない時期である。当時の法令にそって表記すれば、「一九四八年、宮古民政府立―」、「一九五四年　宮古連合区立―、もしくは琉球政府立―」とするのが順当のようにおもわれる。「沖縄県立」への郷愁であろうか。

（「宮古郷土史研究会会報」一九九九・二・十二）

3．西辺中学校創立『五十年誌』

一九九八年は、宮古で「六・三・三制」が施行されて満五十年の節目である。三年制の新制中学校が誕生して五十年ということになる。本土に遅れること一年ではあるが、米軍の全面占領下。他府県はおろか、沖縄本島・八重山とも分断されていて、宮古だけで「宮古教育基本法」「宮古学校教育法」等を制定してスタートさせた点は特筆されよう。各学校では創立五十周年の式典が相ついで挙行され、「記念誌」編集がすすめられている。「五十周年記念誌」第一号として、このほど西辺中学校から刊行された。

周知のように、戦後日本の教育改革は、一九四七年四月一日。教育基本法の施行によって、「六・三・三制」がスタートした。従来の国民学校六年（義務制）、中（女）学校五（四）年、高等学校三年、大学三年制が、小六、中三、高三、大四に改められ、中三までの九か年間は義務教育とされた。その情報をいち早くキャッチした宮古民政府文教部の砂川恵敷部長、与那覇寛長教学課長らは、「いずれは祖国に復帰することを信じていた」ので、米軍全面占領下にあっても唯一日本政府の管轄下にあった宮古島測候所（現宮古島地方気象台）への運輸省の年三～四回の補給船凌風丸の利用を思い立った。当時、東京大学在学中の砂川部長の長男恵弘氏に連絡して、「教育関係の書籍参考書等を託送してもらい、本土の教育制度や新法規の知識を吸収する機会に恵まれた」のである。こうして「教育基本法、学校教育法の国の字を民政府に置きかえる程度の修正した議案を議会に提案、可決、公布（砂川恵敷「全県初の六・三・三制導入に成功」―平良市制三十周年記念誌）してのスタートであった。

「平良中学校沿革誌」は、一九四八年四月一日付で学校教育法が宮古民政府から公布されたことを記したあと、平南中学校・平北中学校と仮称したことを記し、さらに四月十一日付で、平北中は「平良市立第二中学校」と改称。五月二十四日付では、平南中は平良市立「南中学校」、二中は「北中学校」と改称、市長名で告示されている。西辺中学校は当初は平北中学校西辺分校でスタート、翌一九四九年三月三十一日付で北中から独立、西辺中学校を名乗っている。大戦後の米軍全面占領下、宮古そのものがないものづくしのなかで、「自立」を模索する、試行錯誤の過渡期を示すものであろう。ついでに付記すると、平良中学校は一九五二年九月、南・北両中が合併してできたものである。

西辺中学校創立『五十年誌』は、二十二頁のグラビアで巻頭をかざり、赤嶺貞行記念事業期成会長の「発刊のことば」につづいて、関係者九人の式辞・祝辞、五十年のあゆみ、思い出、文武両道を示

す足跡、生徒の作品、ＰＴＡ活動、五十周年記念事業の概要の順で編集されている。「思い出」は、元校長、元職員、卒業生、座談会、以上四つで構成されているが、座談会は一期～四期生が二つ、五期～十期生、十一期～十六期生、十七期～二十二期生によるもの、さらに二十三期～二十八期生、二十九期～三十五期生、三十六期～四十三期生による紙上座談会を構成、五十年のあゆみを卒業生の直接体験で再現している。しかし創立当初となれば五十年前のことであり、記憶は大方うすれているようである。中学校にはいる直前の小学校について、「西辺小学校国民学校」「西辺尋常国民小学校」と不確かな発言で、司会の編集委員長から「西辺国民学校」であったとの訂正がされている。ところがこの司会も国民学校には「尋常科・高等科があった」と発言している。尋常科というのは尋常高等小学校時代で六年制、高等科は二年前である。国民学校に代わってからは正式には同じ六年制の「初等科」である。西辺小は、西辺尋常高等小学校→西辺国民学校、戦後は、一九四六年六月、西辺初等学校（八年制）→西辺小学校と変遷している。一九四八年四月、新制中学校がスタートしたとき、八年生は中三へ、七年生は中二へ、六年制が中一へと進級、中学校三年間を完全に履修したのは三期生からということになる。

赤嶺期成会長は、発刊のことばで、記念誌は「本校五十周年の足跡を顧みるにとどまらず将来を展望する指針として、私達に多くのものを語ってくれる」「栄光の歴史が後輩諸君の世代にひき継がれ未来永劫に輝くことを信じて疑いません」と記している。池間敏夫編集委員長は、編集後記で内容を概説したうえで、「五十年の歴史の書」であると明記している。一九九九・三発刊、Ｂ五判、四〇九頁、非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一一二号、一九九九・五・二二）

４．沖縄国際大学南島文化研究所『宮古・平良市調査報告書⑶』

沖縄国際大学の南島文化研究所は一九九五年四月以来三年計画で平良市の自然・文化・社会についての総合調査を実施しているが、その三冊めの『宮古・平良市調査報告書⑶』がこのほど発行された。同研究所の地域研究シリーズ25として発行されたものである。

今回の報告書には、「沖縄の土地整理事業ノート～宮古を中心に⑵」（春日文雄）、「宮古島のかまど神信仰～上野村と平良市を中心に～」（窪徳忠）、「宮古史雑感⑵」（喜久川宏）、「宮古島狩俣のウプイビムヌの神歌」（新里幸昭）、「平良市人口移動の空間パターン～中心地形成との関連において～」（崎浜靖）、「本村家『報本』碑・法事関係史料紹介」（平良勝保）、資料紹介・沖縄民政府総務部調査局「宮古島概観」（仲宗根將二）、以上七本の論文と資料紹介を収めている。

春日宇都宮大学名誉教授の論文は、明治中期宮古農民によって展開された人頭税廃止運動によってもたらされた政府・沖縄県による土地整理事業について、測地と所有権確定との諸過程（租税者把握のための諸作業、土地整理事務局と農民、宮古の総土地面積の確定）、地押調査と地価（地力調査と農民諸階層、零細農民と地力調査、村間の等級格差）、農民諸階層関係と土地整理（農民層の分解と土地整理、戸籍法によった初期所有者地番）の構成でまとめられている。窪東京大学名誉教授の論文は、一九九七年六月末～七月初め、十一月初旬の二回にわたる調査にもとづく、平良市と上野村の「かまど神信仰の現状」で、池間の一部では、香炉をおかず、ガスコンロそのものを神体として拝んでいる、また、かまど神を台所に安置した上に、事務所にも奉安して金儲けを祈る対象にしているなど、中国

「司過神」としての性格を失って様ざまな御利益をもたらす神とされている点などについて注目している。喜久川教授の論文は、「雑感」といいつつも、池間・来間・多良間などにみられる「間＝ま」の呼称、多良間のトポス、失われた曲玉の謎など、隠れた宮古史の話（問題をひろいあげている。新里氏の論文は、一九九五年十一月五日の神事を録音、考察したもの。崎浜氏の論文は、戦後平良市の地域概念、都市化、字別人口の変化、宮古諸島の人口移動の空間的パターン、平良市住民の移動パターンの分析、県内からの移動、県外からの移動、さらに平良市から宮古圏域への移動、県内への移動、県外への移動、など詳細をきわめている。平良氏の資料紹介は、平良市下里在・本村家の市指定文化財「報本」碑の史的考察と法事関係史料の紹介である。本村家は、向裔氏支流で、近世宮古において下地頭朝祥を生み、近代にあっては第六代平良村長本村朝亮の生家で、多くの史料を保存している。「報本」碑については、一九九八年七月十七日、郷土史研究会七月定例会でも報告されており、本論考はそのまとめにもなっている。B五判、ヨコ組、一三七頁、非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一一二号、一九九九・五・二二）

5．昭和初亥子会平一校・平南中同期生『歓会』

一九三五（昭和十）年四月二日～三六年四月一日生れは、一九四二（昭和十七）年四月、小学校の前身である国民学校に入学している。卒業は戦後三年め、一九四八年三月で、初等学校最後の卒業である。同年四月、学制改革で六・三・三制が施行され、新制中学校初の一年生になった。平一校はその時以来平良第一小学校であり、そのとき同校に併置された平南中はその後、一九五二年九月、平北中と統合して平良中と称し、現在地に移転している。

一九四四年夏、太平洋戦争の激化にともなって宮古のすべての学校は軍に接収されたが、平一校も第二十八師団軍医部とされた。入れ換わるようにおよそ一万近い老幼婦女子が九州や台湾へ疎開させられた。翌一九四五年八月、日本の敗戦後も様々な事情で直ぐには引き揚げ―帰郷できず、異郷の地で戦中・戦後の地獄絵ともいえる体験をしている。悲惨な状況は残留組も同様で、「沖縄戦」にあっては米・英軍の連日の爆撃に脅え、飢えとマラリア等の疾病にさいなまれて、学校は一年近く休校している。

昭和初亥子生れもこうした体験をもつ世代で、一九九五（平成七）年還暦を迎え、同年十一月二十五日中学校卒業四十四年ぶりに平一校に会した。平一校並びに平南中で学んだ同期は二九六人、このうち所在の確認できたのは二〇三人、物故者四一、不明五二、還暦祝いに参加したのは一〇三人の由。席上、平良栄賢、奥浜静江さんら十四人の記念誌刊行委員が選ばれ、以来四年がかりで『歓会』は企画、刊行された。一般にこの種の記念誌は小学校あるいは中学校を一緒に卒業した者のみを同期として扱いがちだが、本書は一年でも在籍した者はすべて同期生として扱い、あらゆる手だてを講じて国内はもとより海外にまで調査の手を広げ、そのすべてを名簿化していることは特筆されよう。小～中を通じての九年間を通史的にまとめた「我が愛する母校・我が師・我が友」平良栄賢、「亥子六〇年の歩み」下地哲男、「旧師名簿」池村嘉信、卒業後の歩みと近況・メッセージ、十八人の寄稿、戦火で破壊された校舎全景の復元図、同期に関わる写真など、行き届いた企画と編集は、今後同種記念誌のよき手本にもされよう。A四判、ヨコ組、一三三頁、一九九九・一〇・三〇刊、非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一一六号、二〇〇〇・一・十五）

六．池間中創立五十周年記念誌『拓く力』

池間中学校創立五十周年記念誌がこのほど、「拓く力」の表題で刊行された。学校沿革を中心に、「池間中にしかない活字を追うことから、目で楽しむページをめざし、特色ある中味に心掛けた」（編集後記）と記すだけあって、写真をふんだんに使った企画・編集ともに出色の出来ばえとして評価されよう。

「沖縄戦」にひきつづいて奄美以南の島々を全面占領した米軍は当初、奄美、沖縄、宮古、八重山の四群島ごとに分轄、統治した。このため各群島には民政府（のち群島政府）が創設され、それぞれ「自立」をうながされた。宮古は沖縄県宮古支庁を改革して再出発、一九四七年三月、宮古民政府に改称した。米軍の許容範囲内とはいえ、法体系の整備など「自立」を模索している。

教育改革もそのひとつである。文教部（砂川恵敷部長）を中心に宮古島測候所（当時）に二、三ヶ月ごとに通う運輸省の補給船を利用して各種法令等を独自に入手、「宮古教育基本法」ならびに「宮古学校教育法」を制定、六・三・三制を施行している。全国に遅れることわずかに一年である。現行宮古の中学校の創設はすべてこの時であり、平良市では平南、平北、鏡原の三中学校が設立された。池間、久松は平南中の分校で、翌一九四九年四月、池間は小中併置校として独立している。小、中併設を分離したのは、本土復帰後の一九七六年四月である。

ちなみに狩俣、西辺両中は平北中の分校で出発し、のち独立、平良中は一九五二年九月、平南、平北両中が統合しての創立である。

「拓く力」は、A四判、横組み、二五七頁に、歴代職員一覧、卒業生名簿一覧（一九五三人）、五十年にわたる学校沿革にくわえて、校区（池間・前里両字）にかかわる様々な出来ごと、出身者の著名な事跡まで網羅している。その上で元校長ら十一人、卒業生二十五人が創立期から現在に至る在職（学）中の回想記を寄せている。

さらに生徒のスポーツ、文化各面の活躍を伝える大小様々な新聞切り抜きを収録しているほか、「一茶まつり」や平良市民総合文化祭など、一九八七年以降各種入賞作品が全文収録されている。いわば池間中学校五十年のあゆみをとおして、池間ばかりでなく、宮古はもとより、沖縄県、全国が最少限一望できる、そのような配慮がなされている。それゆえ「五十年の足跡を顧みるにとどまらず、将来を展望し、未来を拓く指針として、多くの示唆を与える」（石原信一「発刊のことば」）と、記し得たのであろう。後続の各中学校「五十年史」の企画、編集にも影響を与えそうである。記念事業期成会ならびに編集委員会（川上哲也委員長）の労を多とするものである。

（「宮古毎日新聞」二〇〇〇・五・十七）

7．宮古神社『宮古権現鎮座四百年大祭　記念誌』

「町社宮古神社創建七十五周年・現社殿再建二十年記念」の節目に、昨年十月、表題の「宮古権現鎮座四百年祭」を催したことによる記念誌である。内容は、大きく「宮古神社の沿革」と「宮古権現鎮座四百年大祭・諸録」の二部構成で編集されている。さらに「沿革」では、宮古神社の「御祭神」「御由緒」「略史年表」「御造営史」「解説編」の五項からなり、宮古権現鎮座以来、宮古神社の創建、同再建等をへて今日に至る経緯をまとめている。

祭神は六柱で、旧権現堂の速玉男尊、伊弉冊尊、事解男尊の三柱と、町社宮古神社以来の目黒盛定政命、与那覇恵源命、仲宗根玄雅命の三柱となっている。由緒、つまり神社縁起ともいえるものであろうが、「琉球国由来記」や「球陽」等も引用しておよそ次のように

記している。

一五九〇（万暦十八）年、志里万の里（尻間）の平良大首里大屋子（要字）が上国の帰途、朝鮮に漂着して五年、さらに北京に送られて三年の苦難の末、帰国できたのは、「故国の神々の御蔭であると、波上宮（熊野三神）を宮古へ勧請して厚く祀った」、これが「宮古権現堂の創始」であり、一六一一（慶長十六）年には、「薩州の検察使の上奏により、琉球王国は瓦葺の立派な宮（神社）として造営し『熊野三所大権現』の称号を賜った」という。

記述どおりだとすれば平良大首里大屋子が帰国したのは足かけ八年後であろうから一五九七年にあたる。また、権現堂は「龍宝山祥雲寺縁起」として同寺開山に位置づけられていることからすれば公的創始は一六一一年とみなすのが順当ではなかろうか。「御祭神関係含む」とした「神社略史年表」にも、権現堂創建時のもようは、一五九〇年、一六一一年の二項のみ明記されていることもその裏付けとなろう。「解説編」は、末吉大孝宮司の執筆である。二〇〇一・一・十九刊、B五判、本文七九頁、非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一二三号、二〇〇一・三・八）

8．川上哲也「んすむら～西原村立て百二十五周年記念」

一九九九（平成十一）年は平良市西原が近世末期、「村立て」してから一二五年にあたる。同年四月一日西辺中学校に赴任した池間島出身の川上哲也氏は、出自を同じくするという思いもあってのことであろう、校区へのこだわりからこの節目の年を記念して「んすむら」の発刊を思いたったようだ。

一八七九（明治十二）年四月、廃藩置県のころ、宮古には三八か村（現行大字）あったことが知られている。このうち平良四か村（荷川取、西仲宗根、東仲宗根、下里）や松原、友利、狩俣などの古琉球以来の村々を別にすると、半数近い十六か村は近世琉球においての村立てである。川満、佐和田の両村は十七世紀末で、十八世紀にはわずか数十年の間に十二か村も設立されている。嘉手苅、大浦、保良、野原、長間、西里、比嘉、新城、国仲、仲地、長濱、前里の各村である。西原、福里の両村は一八七四（明治七）年、近世最後の村立てになる。

近世琉球における村の新設は、ほとんど人口の増加か、住居が広範囲に散在して行政指導が十分にできないこと等が理由にされている。福里村は後者で、西里村からの分離独立である。西原村は前者で、池間村からの分離、新設となっている。池間村の人口が一八〇〇人余になったので、大地（ウプヅー：宮古島）の横竹に新たに村立てした（「宮古島在番記」）というものである。この表記にしたがえば池間島でなく「池間村」と限定されているので、現行字池間と伊良部町字池間添からの分離であったと考えられる。『西原創立百周年記念誌』（一九七四年）は、池間から八三戸、佐良浜から十五戸、以前から横竹に住んでいた二戸を加えて九〇戸による村立てであった、と記している。この場合の佐良浜とは「池間添」のことであろうか。ほどなく池間島の聖地「オハルズ」（ウパルズ）の神も勧請（かんじょう）して村と村人の守護神としたのであろう。強制村立てといわれ、多くの悲話も伝えられている。

それから廃藩置県をはさんだ八年後の一八八二（明治十五）年八月、宮古を視察した時の県令・上杉茂憲一行は、西原村について、「池間島」から移った当初は九二戸であったが、現在は一〇五戸になっている、と記している。移住の理由については「池間島ハ地面狭クシテ人民太タ多ク之ニ反シテ当西原村ハ荒蕪不毛ノ地多クシテ

人煙甚タ稀少是ヲ以テ遷居セリト云フ」とつづけている。移住後「二か年は免税、一か年は半税」にして、免除分は新村に充当させたとも記している。

さらに一八九三（明治二十六）年一月調べでは、戸数一二七戸、七八四人（男四〇三、女三八一）である。同年四月、黒砂糖製造のために宮古に寄留した徳重盛之助、井之口政次郎両人（共に鹿児島県人）とサトウキビ栽培を契約した西仲宗根、荷川取、西原、大浦四か村の農家各二人、計八人のなかの西原村の二人は、前泊岩一と楚南仁である。また、同じころ人頭税廃止運動の指導者の一人、中村十作のために一八九六（明治二十九）年三月作成された「宮古島水産組合規約書」に明記された組合員七二人のなかで、池間、前里両村は各一人であるが、西原村は二人、前泊加那志、兼浜真佐利の名がある（『平良市史』第四巻資料編二）。

一九〇五（明治三十八）年、宮古の教育状況を視察した県視学・山口源七は、各学校の特色についてふれたなかで、西辺尋常小学校西原分教場について、「一准訓導瀬名波起昌君、教授に熟練し、小黒板の応用、色チョークの使用等に注意し、児童をして厭かしめず、二尋常一年二年のみなれども、言語明瞭にして、普通語能く使用す」（『琉球教育』（一〇一号）と評している。また、別条では「教授に巧みにして興味ある授業をなせる」教師として三校三人の名を挙げているが、そのうちの一人は「西原分教場准訓導瀬名波起昌君」ともある。ちなみに瀬名波准訓導とは、那覇市久茂地出身で、若くして、宮古で代用教員になり、その後、兵役、台湾勤務等をへて再び宮古に帰り、一九二〇（大正九）年以降は新聞事業に従事、生涯を新聞人として知られた瀬名波進その人である。

西原の村立て当初から明治期を通じてのいくつかのエピソードを史実に沿ってひろいあげてみた。必ずしもこれだけのことで草創期の西原の特性を示すことにはならないが、多少とも往時を知るよすがともなろう。

西原には一三九〇年、初めて沖縄本島の王権と交渉をもった与那覇勢頭豊見親が尊崇したと伝えられる広瀬（びつし）御嶽もある。同じ西辺中（小）校区の大浦には、古琉球期であろう、中国渡来人の伝承もある。オハルズ・仲間両御嶽を中心に、年に数十回近くも祭祀があるという西原の人びとのきずなは、池間系住民のなかでもっとも強く感じられる。昨年来、地域の先輩方にまじって西辺中学校教育懇話会「文武両道を語る会」に参加させてもらっているが、地域の方々の学校への関心は非常に高い。

こうした校区の歴史と伝統を知るにつけ、川上校長は、児童生徒にもっと地域を知ってもらいたい、自分も地域を知りたい、地域の方々、とりわけ何かにつけて三三五五学校を訪れ、協力を惜しまない高齢者の皆さんに感謝の意を表したい、と考えたのであろう。記念誌「んすむら」発刊の意図はその辺りにあるようだ。これを契機に、地域にこだわる川上哲也校長の思いが全面開花し、「西辺」の教育がいっそう前進することを期待するものである。

（二〇〇一年一月二一日）

9．城辺町教育委員会『ぐすくべを訪ねる～史跡・記念碑・御嶽・井戸』

城辺町内で確認できるすべての遺跡をはじめ、御嶽、カー（井泉）、記念碑等をとおして城辺町の歴史や自然、文化財、著名な人物など各面にわたって概観できるよう構成されている。

「史跡」は、マムヤの屋敷跡、保良元島にはじまって、浦底、上比

屋山など十二件、「民俗文化財」は、友利あま井、ウイピャームトゥの祭場など九件、「天然記念物」は、東平安名崎の隆起珊瑚礁海岸風衝植物群落、仲原化石（クジラ）など七件、「記念碑等」は、割目「区創立記念碑」、人頭税撤廃「顕彰碑」など十三件、「石碑資料」は、顕彰碑（平良真牛、砂川正亮、上原戸那、高里景親、西里蒲、比嘉財定）、部落創立記念碑（吉野、福里、比嘉、長北、下北）など七件、以上はいずれも写真付きで碑文全文もしくは解説が付いている。さらに「御嶽」は、福嶺学区三十、城辺学区四十、西城学区四十五、砂川学区三十二件、「湧水、集落の井戸」は、福嶺学区二十一、城辺学区二十八、西城学区三十九、砂川学区十四件、以上はいずれも多いせいもあろう、一つひとつ地図上に番号を付して所在地を示している。

巻末に記念碑等に関しては「年表」が付されていて便利である。すべて近代以降ではあるが、もっとも古いのは、一九〇三（明治三十六）年、首里の新垣三良に掘削させた下里添村の富竹井（とぅんだきかー）、ついで一九〇四年の中井（比嘉）、一九〇八年ニスニャー井（下里添）、一九〇九年比嘉九四三南の井戸、一九一一年のムラグスヤー井（下里添）と、いずれも明治期の井戸掘削がつづいている。管見によれば、近代に入って井戸掘削の初出は一九〇〇年、地盛・七原両集落の地モリ井、ついで一九〇一年、細竹井とつづく。人頭税廃止運動で自信を得た民衆が、天水と限られた湧き水のみに頼る生活用水からの解放をめざして、井戸掘削をはじめたとみなされており、明治三十年代半ば以降、宮古全域でみられる現象のようである。

ともあれA五判、一〇九頁にまとめられた「ぐすくべを訪ねる」は、古代宮古から近現代に至る城辺の歴史や文化等について、「モノ」をとおして知るかっこうの手引きとなろう。二〇〇二・三刊。非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一三一号・二〇〇二・七・十一）

10．宮古広域圏事務組合『水の島　水先案内人』

夏になると、恒例の「天女の水まつり」や「湧水めぐり」を催して、地下水の保全に力を尽くしている宮古広域圏事務組合がこのほど、和英両文のリーフレット「水の島　水先案内人」を発行した。A四判、三枚折りの六頁建てに宮古の代表的な十五か所の湧き水や地下ダムを紹介している。

「私は天女、そして泉の化身。遠い昔、この島は美しい南の海から生まれたの。コーラルでおおわれたこの島は誕生と共に多くの歴史をつくってきたわ。水は命そのもの。島の人々は一滴の水を大切にしながらきょうまできたの。水がもたらしてくれた喜び、水がもたらす悲しみ、そんな暮らしぶりをみてきた私が島の湧き水へと案内するわ」の口上で始まり、大和井、盛加がー、イザガー、成川ガー、ヒダ川、白川田水源地、山川の大川、野加那泉、前井、プイキャー、保良ガー、七又湧水、ムイガー、友利あま井、福里地下ダム、と十五か所をそれぞれ数十字ていどで紹介している。うりがー、平地の湧き水と掘抜き井戸、湧き水のしくみ、など宮古の水の特徴について適宜「メモ」しているのも好感がもてる。もっとも「洞井」に「ドゥガー」と方言らしい新語をつくって読ませたり、普通名詞で、単語ではあくまで「カー」であるはずなのに、「ガー」としたり、気になる点もないではないが、初めての和英両文の「案内」は、外国人からも好評を得ることであろう。

（「宮古郷土史研究会会報」一三一号・二〇〇二・七・十一）

11．狩俣自治会創立百周年記念『自治百年』

狩俣自治会は一九〇二（明治三十五）年、「十日会」の名称で設立された。それを記念して、二〇〇二年三月十九日、自治会創立百周年の式典を挙行、同年十二月二九日、元村番所跡敷地に「自治百年」記念碑を建立、除幕した。さらに、このほど記念誌『自治百年』（題字は佐渡山正吉氏）を刊行、百周年に関わるすべての事業を終了した。

記念事業期成会は二〇〇一年七月に発足、記念誌、財務、事業の三委員会が設置された。『記念誌』は、国仲一男を委員長に、十人の編集委員で取り組んでいる。狩俣自治会百年のあゆみ、座談会（ふるさとを語る）、回想録、くらしと教育、地域の行事、地域の活動、産業の発達、郷友会活動と狩俣集落の歴史はもとより、現在に至る全般を網羅、「字誌」そのものの位置づけと言えそうである。「百年のあゆみ」では集落の概要、生い立ちと移り変わり、百年の沿革概要（資料）、「くらしと教育」では、生活の移り変わり―衣・食・住・戦中・通信と情報機関・交通路の整備と輸送機関・保健衛生・冠婚葬祭など、教育の移り変わり―西辺小学校の誕生・狩俣尋常小学校の独立・狩俣尋常高等小学校に改称・狩俣国民学校に改称・狩俣初等学校に改称・中学校の誕生・分教場と幼稚園教育・学校後援会とＰＴＡ・学校の現況（資料）など、「産業の発達」では、農業の移り変わり―さとうきび・葉たばこ・主要作物以外の推移、基盤整備事業、漁業の移り変わり―カキィ漁法・バラザン・追い込み漁（ツナカキヤー）・小型巻網漁・もずく養殖漁業など、「むらの遺産」では、文化遺産―文化財・史跡・天然記念物等・遺品とトゥーリャ・ムトゥとザー、集落地図―小字名と屋号・福木と井戸・パナリと浜など、「郷友会活動」では、在沖縄本島並びに在八重山の二つの狩俣郷友会の設立以来のあゆみ・歴代役員・活動の記録・記念式典・祝賀会など、どの分野でも詳細をきわめ、「狩俣百科事典」の感を抱かせる。B五判、三六三頁、箱入り、二〇〇三・十一刊・非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一四〇号・二〇〇四・一・八）

12．東京共同法律事務所『憲法の危機をこえて～弁護士活動からみえる人権～』

本書は、東京共同法律事務所に所属する十四人の弁護士全員が『憲法と人権』にかかわる裁判や活動、さらには憲法と人権について考えていることなどについて」執筆したものである。事務所設立四十年という記念すべき節目を迎えての刊行ではあるが、書名どおり憲法九条をめぐるこの国の危機的状況をひとりでも多くの人に知ってもらいたいとの願いがこめられている。事務所設立以来「日本国憲法を守り、生かす」ことを拠りどころに、「常に働く人や市民の権利と生活を守る視点に立って活動」してきたひとつの法律事務所の実績の記録である（「出版にあたって」）。

書名からくる第一印象では、法律専門家による固い法律の話ばかりであろうと受けとめ、一瞬たじろいだものだが、読み進むうちにそれが如何にはやとちりであるかを気づかされた。確かになかには国を代表する政治家相手に法律論を駆使、渡り合っているような場面もある。反面、ひところ世間の耳を集めた「オレオレ詐欺＝振り込め詐欺」の被害者ばかりか、騙されて加害者にされてしまった若もの、オカルト宗教に引っかかって自宅を担保にノンバンクから借金までして多額の金を騙し取られた女性など、うっかりすると誰れもがやられかねない様々な事例も臨場感をもって紹介されている。

本書全体の構成は、「戦争と平和のはざま」（三編）、「自由は今」（五編）、「差別とたたかう」（三編）、「広がる『格差』と破壊される生活環境」（八編）、「憲法を守るために」（二編）、以上五つの柱立てで、二十一編収録されている。くわえて一般市民に親しめるようにほとんど各編ごとに関連するコラムが付いていて、どこからでも読めるように配慮されている。

出来れば表題だけでもすべて紹介したいが、紙幅のつごうでそうもいかないので、巻頭の「憲法制定のころと私の青春」（角尾隆信）と、ほぼ巻末の「護憲の流れをつくる『手をつなぐ』活動」（猿田佐世）の二編について要約を紹介したい。

「憲法制定の…」は、日本国憲法が施行された当時、文部省は「新しい憲法のはなし」を生徒に配付した。「この当時政府も国民も、新しい憲法によって日本は平和国家になったのだ、二度と再び戦争をしない国になったのだ。軍隊などは一切ない国になったのだ、と信じ、これを疑う者はいなかった」、以来六十年、アメリカの対日政策の変更で自衛隊が創設されても、「憲法九条平和条項のお陰で」戦争しないできた。「戦争の悲惨は語りつくせない。二度と戦争をしてはならない」「憲法九条はしっかり守っていかなければならない」と、力説している。

「護憲の流れ…」は、「法律家は立憲主義、即ち、憲法が『国民を縛る』ものではなく『国民が国を縛るもの』であるということを根本的な概念としてたたき込まれ、これが分かっていなければ司法試験に通らない」、しかし「権力者は権力を濫用する危険があり、濫用させないために必ず憲法で権力者を縛る必要がある」のに、改憲論議では「憲法には権利ばかりが書いてあり、義務が書かれていない」などと、「立憲主義そのものを根底から覆すような意見が本来縛られているはずの権力者の側から垂れ流されている」、「憲法が危ぶまれている今」「経験と知識をみなが持ち寄って、大きな声を上げねばならないのではないか。できる限りたくさんの声を、一堂に集めて護憲の流れを作っていきたい」「とにかく手をつなごう」とよびかけている。この国の最高責任者が「美しい国」の美名のもと、「海外で戦争ができる国」へ方向転換しようと声高に叫ぶこの時期、ひとりでも多くの人にお薦めしたい一書である。

なお編著者三人―宮里邦雄・山口広・海渡雄一――の中のひとり、宮里弁護士は平良・西里の出身。宮古高校（十期）から東京大学法学部に入って、司法試験に合格、以来四十余年、法曹界で活躍している。とくに労働法分野では著名。本書では「規制緩和とのたたかい～タクシー運賃ダンピング通達国家賠償請求訴訟」「国家的不当労働行為とのたたかい～ＪＲ採用差別事件」の二編を執筆している。平良・下里のふじ胃腸科医院長・宮里不二雄医師は実兄。

（「宮古毎日新聞」二〇〇七・七・十九）

13．池間文化協会設立二五周年記念誌「やらはでぃ～スマウツに魅せられて」

一九九七年十二月二五日設立された池間文化協会（川上哲也会長）が、このほど二五周年を迎えて記念誌「やらはでぃ～スマウツに魅せられて」を発行した。「やらはでぃ」とは池間の方言で「頑張る」の意だが、「ンナマカラ　ヤラハディ」と言えば「これから行かせる」となり、関連して「やらひー」と言うと「堂々と、勇ましく」、「ヤラヒーミール」と言えば「やってみろ」の意になると言う（「題名〈やらはでぃ〉について」。）

1．美しい旋律と響き

編集に際しての「スマウツ（方言）」に対する基本的な考え方は、「島の暮らしの中にあったスマウツ（島口）は独特の美しい旋律と味わい深い響きを持っ」ており、「その土地特有の人たちだけにしか通じない雰囲気で言霊となって味わい深く土臭く人々の中に溶け込んで」いて、「標準語では表現できないオリジナルな空気を醸し出す土俗文化」であり、「リズムのある口承文化だ」との認識のようだ（「スマウツ〈島口〉に魅せられて＝はじめに」）。

一章「池間島にまつわる風習の点描」五二語、二章「知られざる追憶のアルバム」一二八語、三章「先達の口伝・語りを永遠に」六〇語、四章「泣き笑いの日々に生きて」一一八語、五章「海にかける男のロマン」六七語、六章「史実を秘めた人間模様」七九語、七章「懐かしい故郷の原風景」九四語、八章「心に宿るンマヌ（母）フツユン（語り）」七〇語、以上八章、六六八語収録されている。

各章の巻頭には、九～十七点の関連するのであろう写真が各一頁設けられ一層内容の理解をたすけている。このように全体として川上会長を中心とする役員会が、四月ごろから原稿のまわし読みを始めて校正に辿り着いた成果だという（松川浩「発刊によせて」）。

2．酒座や食卓の話題に

しかも大方の語句には故人はもとより、現存する人びとがどのようなとき、どのような所で語った、と臨場感あふれる説明がついていて、「スマウツに魅せられて」「辞書的な手法でなく物語風で読む楽しみをねらっ」ての編集であり、「シマの遺産」と言える『スマウツ』が島人に話のネタとなって酒座や食卓の肴になることを期待し」ている（「編集後記」）とは、編集者冥利（みょうり）につきる言葉と言えよう。

3．特徴ある方言

宮古方言の「K音」（カ行）は通常「H音」（ハ行）に転訛する場合が多い。「クチ（口）」が「フツ」、「クウ（食う）」は「フォー」、「くれる」は「フィール」、「黒い」は「フフォーフォ」、「暗い」は「フファーフファ」、「コ（子）」は「フファ」、「クサ（草）」は「フサ」…のように。

平良地域一般では「クチ（口）」は「フツ」だが、池間方言では「ウツ」である。H音つまり子音「フ」が脱落して母音「ウ」のみ残っているのである。このような宮古一般とは異なる池間方言の特徴は、「P音（パ行）」のないことにもみられる。

池間のみならず宮古を代表する御嶽の一つである「ウパルズ御嶽」とは平良一般の呼称だが、池間方言では「オ（ウ）ハルズ御嶽」と清音になる。「ウプシュウ（大主）」は「フシュウ」、「ウプツカサ（大司）」は「フヅカサ」と、逆に「母音」が脱落して「子音」が残るなどの特徴も持っている。

4．「地域の知恵の総体」

巻頭に、大城裕子教育長と饒平名和枝宮古島市文化協会長が祝辞を寄せている。大城教育長は「スマウツを通して浮かび上がる島の自然、文化、人物、歴史等は、『池間島』をかたちづくる大切な要素であり」「文化的にも民俗学的にも貴重な財産となる」、饒平名文化協会長は「方言は、長い歴史の中で地域の人々の生活やそこで育まれた独自の文化を支えてきて」おり、「地域の知恵の総体」であり、「連綿と続く池間の伝統や価値観までも垣間見えます」と賞賛している。

池間文化協会設立二五周年記念誌「やらはでぃ～スマウツに魅せられて」のため資料収集から整理、編集発行に尽力した諸士の労を

多としたい。A四判・横組・一二二頁。

（「宮古毎日新聞」二〇二二・一〇・五）

第四部　人…

1．池間金蔵『新聞投稿　よもやま話』

下地・来間出身の池間金蔵さんが一九八七年から十年間、『沖縄タイムス』（茶のみ話）や『琉球新報』（茶わき）に投稿した随筆三六八編のなかから一〇〇編をえらび、『よもやま話』と題して出版した。一年間に三六～七編、月平均三編、十日に一編の割で掲載されたことになる。題材の豊富さ、テーマに対する真摯な取り組みと執筆、敬服するばかりである。

妻や子ども、嫁、孫、近所の子どもなど、身近な話題から、宮古の歴史、自然、歌や踊り、幼児のころの遊び、果ては現地召集による軍隊経験から、米軍基地あるがゆえの県民の悲しみ、怒りなど、身近に起きるあらゆることがらにわたっている。「来間郷友会　がんばろう！」「アララガマ精神とウトーリ」「懐しい方言」「クイチャーの神通力に期待」「思い出のシートーヤー」「茶のみ話への挑戦」「サシバ舞う緑を取り戻そう」「十月夏とアワまき」「県民投票」「許せぬ基地の県内移設」など、恣意的に題名をひろいあげるだけでも興味はつきない。いずれも八〇〇字ていどで読みやすく親しみやすい。

郷里の元校長国仲昌行氏が「発刊によせて」で、継続と文章表現のうまさを賞賛した上で、「池間金蔵という人は知らないけれども池間金蔵という名前は沖縄全県に知られているのでは……」と記している。本書には記されていないけれども、池間氏は米軍占領下の一九六〇年代初頭から中葉にかけて、サトウキビ代闘争から製糖会社合併反対闘争に至る過程で、全沖農宮古地区役員の一人として、来間のキビ作農家の中心になって誠実に活動した経歴の持ち主でもある。B五判、二二六頁、非売品、一九九七・三刊。

（「宮古郷土史研究会会報」一〇三号、一九九七・七・十一）

2．川上哲也

『にだてぃ～平良市教育行政に携って一〇〇〇日の足跡』

今春四月の定期人事異動で西辺中学校に転出した著者が、それまで満三年（うち二年は課長）にわたって携った平良市の教育行政についてまとめたものである。実際にはそれよりさきの五年間は県の教育事務所で指導主事を勤めており、それからすれば教育行政にかかわること八年ということになろう。さらにその前の二十年間は、国語科の教師として、大神、福嶺、平良、佐良浜、上野の各中学校で教鞭をとっている。それらの延長線上につづく平良市の教育行政である。たんなる平良市の教育行政三年の記録に止どまらないことは、十五章からなる本書の章立てを一瞥するだけでも首肯できよう。

1学校教育課の経営に「にだてぃ」事業の模索、2学校現場と違う教育行政、3学校訪問における講話・指導助言及び講評、4学校教育課（平成八～十年）の冊子等を綴った発刊のことばと編集後記、5あいさつは気合いが入る、6某月某日の著書が語る巻頭言、7宮古教育の殿堂から天下の平良市教育委員会そして西辺中学校、8ある日の講演、9ふるさと池間は心の灯台、10大神小学校の再開で目覚めた地域史探訪、11教育行政からみたあの日あの時、12学校教育課の日誌の片隅から、13課内通信「たまうつ」の主役を演じる、14自分流の教育実践史をつづる、15新聞の切り抜き、とつづき、「あとがき」で結ばれる。

学校現場にあるときは「学校通信」、ＰＴＡにも密接にかかわって「ＰＴＡ会報」、さらに地域では隣組活動のなかで「会報」づくりなど、どの章にもこうした著者の日常生活が反映している。十三章の課内通信「たまうつ」ひとつみても、職員に責任分担させて、三年間に一五〇号をかぞえる。平均して毎週一回はでていることになる。公私あらゆるところで記録を残そうと心がける、基本姿勢を示しているともいえよう。

三年間、著者の上司であった砂川道雄教育長が「川上先生は、「にだてぃ」の連続であったような感じを受ける素晴らしい三年だった」と祝辞をよせている。ちなみに「にだてぃ」とは、著者の出身地池間の方言で、「に」は、新しい、「だてぃ」は、建てる、創る、と捉えて、新と創の複合語であろう、と記している。Ａ五判、一五四頁、一九九九・七・一刊、私家版。

３．川上哲也『与那原シゲ米寿記念～しげぶば』

池間島は宮古でも有数の長寿の島である。そのせいか著者の周辺には長寿者が多い。本書は一九八八（昭和六三）年八月以来、著者五冊めの長寿記念誌である。そのつど池間の近代史に位置づけながら米寿を迎えた主人公の八十八年のあゆみ―生き方に光をあてている。

本書の主人公「しげぶば」の八十八年のあゆみに重なる池間の近代史、生業、神事、歌謡等に加えて、カー（井）、トゥガイ（岬）、ブー（入江）など地域にまつわる話題も適切な写真とともに随所に散りばめられている。数多くの収録された関連の新聞切り抜きのなかには、池間について語る、伊良波盛男、上原孝三、谷川健一、渡久山章、比嘉康雄、外間守善、前泊徳正、目崎茂和ら多くの顔ぶれが登場している。Ｂ五判、六二頁、一九九九・八・八刊、私家版。

（「宮古郷土史研究会会報」一一四号、一九九九・九・一〇）

４．川上哲也「うだい」

川上哲也君は若い友人の一人である。こう書きだしてから、ふっと考え込んでしまった。しんがりとはいえ昭和一ケタ生まれの当方よりは、ひとまわり後の戦後世代という点では間違いなく若い。とはいえ団塊の世代というからもはや五十代に入っているはずである。それを若いと言っては世間一般の常識からは矢張りおかしいだけでなく、中学国語教師としての見事なまでの足跡を知るものからは当を得ないかもしれない。それでも川上君について思い浮かべるごとに、つい若い友人というのが口をついてでるのである。

川上君を知ったのは教職のスタートを大神中で始めた頃だから、かれこれ三十年近くたっていよう。当時は「祖国復帰」前であり、免許状所持のアンバランスもあって、教員採用試験に合格し、定数内配置であっても何年間かは期限付採用という、不安定な身分制が設けられていた。教職員会事務局に勤務していたせいで、役員の先生方と学校分会ごとに実情調査に当たっている頃の出会いである。

それから何年かして、請われるままに平良市教育委員会に転職、「ミャークヅツ」調査で池間島に渡った。池間大橋の架かる以前であり、狩俣から黄金丸で渡り、二、三日長浜旅館に宿泊しての調査である。今は亡き前泊徳正さんに導かれて、初めてのミャークヅツとの対面であった。各ムトゥでの調査の合間をぬって、前泊さんの家を出て何歩も行かぬとある民家の門前で、大神中から福嶺中に移っていた川上君にばったり出会った。疎遠といってもおかしくないほどの久しぶりの出会いであったが、まるで日常の延長のような

素振りで背後の家を指さして「我が家です。さあ、どうぞ」とさそい入れた。島中がミャークヅツを祝い、賑わっていたせいもあったかもしれない。初対面とは思えぬ母上はじめ一家の歓待を受けつつ、ひょいと見上げると、表彰状らしき額が鴨居の上に掛けられていて、「川上金之蔵」と読める。お父上だという。思わず頬がゆるんだ。大正の初めに急逝した我が家の祖父は「富造」であり、父は「金一」なのである。貧しかった庶民の、ささやかな願いをこめたであろう命名の共通性に共感するものがあって、川上君への親愛感を一層深くしたものである。

以来、川上君のことが話題にのぼるごとに当時のことが回想される。脳裏に浮かぶ川上君は眼前にいても常にあのころのままである。若い友人―と呼ぶ所以である。

その川上君が、その後、平良中、佐良浜中、上野中を経て宮古教育事務所五年、平良市教育委員会三年の教育行政を体験して、八年ぶり教育現場へ戻った。故郷の池間島に出自をもつ人びとの子弟が大半を占める西辺中学校長としての再出発である。

世俗には何でも出来る人を称して「手八丁、口八丁」ともいうが、川上君を知る人は、そのうえに「文筆」の才を加えるであろう。現場にあっては「学級通信」や「学校新聞」から「ＰＴＡ会報」、地域にあっては「自治会報」さらに、「家族通信」をはじめ、身内の様ざまな祝い事のつど、大小様ざまな記念誌を企画、執筆、発行しているからである。

文部省主催の全国新任中学校長研修会で、講師陣ひとしく「校長受難の時代」を口にしたと言うのに、わが新米校長は着任早々「個性ある学校経営の創造」を鮮明にしている。入学・卒業記念に校地に芭蕉やザウカニ（グミ）を植える、ひとり一課題、人それぞれに花ありで、個々の「子どもカルテ」、千客万来ノート、等々、そのアイデイアは尽きることを知らない。瞳輝く子ども達は「未来からの留学生」であり、それを託された同僚職員はすべて個性豊かで、「取り巻く地域と出身者はすべて学校の応援団」であるという。教え子と同僚職員と父母、地域社会への絶大な信頼から発する言葉であろう。

西辺中に着任早々、請われて「琉球新報」夕刊のコラム「南風」に連載したエッセイをまとめて小冊子にするという。作品はすべて「素朴で人間味あふれる精神文化の原点が見え隠れする」地域に根ざし、前述の教育理念に基づく結晶である。人は思いを語ることで自戒をうながし、書くことでその影響の大きさから一層自らに責任を負わせ、実践をうながす。思い入れが深いほどに、その課題はさらに重みを増やすことになろう。

小エッセイ集とはいえ、この「うだい」を公刊することで、川上君はさらに自らに学校経営者としての決意と責任の重大さをせまっていくことになろう。願わくば、川上君のこの意を諒とされ、同僚職員はじめ、父母、地域社会の連携のもと、「未来からの留学生」たちの限りない可能性の開花に向けて、民主的な学園づくりが着実に前進するよう、心から期待するものである。（一九九九年一二月二〇日記）

5．平良新弘「海人（インシャ）の島」

本書は、宮古（池間島）で生まれ、宮古で育ち、宮古で生きる、ひとりの庶民が子や孫に残す六十五年の、宮古とともに歩んだ誠実な足跡である。

執筆の動機について、「はじめに」で端的に記している。一九三六

（昭和十一）年生れの著者にとって、「少年期は極度の食糧難」、中学卒卒業後は生きるために十五年にわたって「海人（インシャ）として働き続けた」。その間「この世の終わりかと思ったことも五、六回はあった」という。このような「少年期の飢餓も海人時代の遭難も全て太平洋戦争のもたらした異物であ」り、「元気で六十五才の節目を迎えたのは奇跡的であ」る、という思いから、「親にとって生まれ故郷のことを子供たちに伝えるは当然の責務であ」り、さらには「戦争の悲惨さを体験した者の一人として子や孫たちに、戦争の愚かさを伝える義務がある」と考えたからである。

四部構成で六三編、一連番号を付して収録されている。一部「島めぐり」は、一～十五、二部「少年時代」は、十六～三二、三部「海人時代」は、三三～四八、四部「郷里の思い出」は、四九～六三である。このうち執筆年月の明記されているのは十二編、もっとも早い時期の池間大橋開通の「平成四年二月」。他の年月のない五一編は六十五歳の節目を迎え、前記の動機にもとづいて記憶をたどり、あるいは先輩や友人らからの聞き取り、さらには文献を渉猟してまとめたものであろう。

「島めぐり」では、ミジュンマ（水浜）はじめ、アガイグス、仲間越、ンナトウ、トゥーイヤー、マサカダツ、ムイクス嶺、ヤマトゥバマ…など、池間島の人びとに古くから馴染み、親しまれている小さな浜、岬、岡まで登場する。しかも筆者はもとより、人びとがその土地にどうかかわっていたか、きわめて具体的で、地図まで添付されており、臨場感あふれる地名紹介にもなっている。

「少年時代」には、「ウカマ石と三つのサカズキ」「まき不足の時代」「暮らしと養豚」「島の結婚式」など、実体験にもとづく池間の民俗が語られ、サウガツ（正月）、旧十六日（ユーイ）、サニツ、ヒヤーリクズ（海神祭）、十五夜、ミャークヅツなどの年中行事も、まるでその場に居合わせて体験しているかのようである。

さらに「海人時代」は、十五歳の「海人一年生」で早くも無線機もラジオもなく漁場を離れて二十五時間、台風に翻弄されつつ深夜池間にたどりつく死の恐怖を体験する。かくて「ニガツマーイ」（二月風廻り）も体験、「カツオ漁あれこれ」「アカイカ釣り」「甲イカ漁」「サンゴ採取」「八重干瀬と観光」、池間の海人としてあらゆる体験を積んでいく。

一九三六年十月、池間生れの著者は十五年におよぶ「海人」生活に別れを告げ、須磨子夫人とともに三歳十月の長男、一歳の長女を連れて平良に移り、「みやげ品店」を始める。二女は平良生れ。一～三部につづく四部「郷里の思い出」は、一九九七年六月、宮古方言大会に出場したときの論題「海の美しさと宮古島」で結ばれている。宮古の「この美しい海、素晴らしい自然、優しい心を何時までも大切にして、黄金の里宮古島、豊かな島宮古島を“島のあるかぎり、国のあるかぎり”誇りに出来ることを信じて」ている、とのよびかけは、三人の子どもとその孫ばかりでなく、宮古に住むすべての人へのよびかけでもあろう。「文は人なり」という。読後、清涼感残る一書である。

なお八月二十五日池間で催された祝賀会には、あいにくよんどころない先約で欠礼してしまった。改めてご容赦を乞う次第である。

（「宮古新報」二〇〇二・九・六）

6．川上哲也『すでぃがふぅ～教職38年の足跡』

川上哲也氏が本年三月、西城中学校長を最後に三十八年に及ぶ教職を去るに当たって、『すでぃがふぅ～新聞等に登場した教職三十八

年の足跡〜』を刊行した。まさに表題通り一九七一年四月、大神中を振り出しに三十八年に及ぶ教職の場から新聞等に執筆、あるいは取材を受けた報道そのものの記録である。

十章、二四八項からなる目次は、そのつどの執筆にさいしての表題や、報道時の見出しによって構成されている。章題のみ示すと次の通りである。

第一章―個性ある学校経営の創設・西城中学校、二六点、第二章―魅力ある学校づくりへの道・下地中学校、二八点、第三章―地域と共に創る学校・西辺中学校、一八点、第四章―西城中で「学校公園化」の構想、一四点、第五章―下地中学校における台湾交流を舞台にしたドラマ、二三点、第六章―西辺中に新米校長として「たまうつ先生」の誕生、三一点、第七章―もうひとつの活動あの日あの時、一六点、第八章―宮古毎日「無冠」、琉球新報「南風」執筆の足跡、一八点、第九章―公園及び新聞への投稿と書籍等に掲載された記録、五九点、第十章―拙著「たまうつ先生」「カツオ万歳」の周辺、一五点。

教職現場で二十一年をへて、教育事務所の指導主事五年、教育委員会で課長等三年と教育行政経験を積んでの校長職九年（西辺中四年、下地中三年、西城中二年）は、著者をして「学校は筋書きのない感動のドラマである」「舵取り次第ではオンリーワン日本一の学校をつくりあげることは容易だ」「それは管理者の揺るぎない哲学、洞察力と信念で個性を発揮できるからだ。発想の着眼点を信じて大胆に走れたら教育改革の発信基地になるだろう」、それには「模倣でなく創造することが条件だ」（「まえがき」より）と、自信にみちた発言をさせている。よほどよい先輩、同僚、地域社会…にめぐまれての発言―成果と思える。

校長としての初の赴任校が西辺中であったことも幸いしたのかもしれない。同校の主たる校区は著者の出身地である池間島を出自とする人びとが大半を占めているからである。言葉も、気質もほとんど百％同様であり、地域にすんなりとけ込んで地域社会の信頼をかち得ての成果が「たまうつ先生」であろう。五七回、のべ三一八名にのぼる人びと、とくに各分野で豊かな人生経験をもつ高齢者が学校に招かれ、その持てる知識、情報、体験等を気軽に生徒達に語る―分け与える、このように日常的な学校と地域社会との連帯のなかでは非行の生まれる余地などなさそうである。

こうした地域に根ざした学校経営からくる自信が下地中では「台湾交流」という「感動の泉があふれ夢に懸ける橋『国際親善』、広く生徒らの目を世界に開かせ」、その後につづく西城中では、逆に改めて足下にしっかりと目を向け、これまで同様に学校・父母・地域社会の三位一体となった、みどりあふれる「学校公園化」への道を歩ませているのであろう。

一〜六章は、西城中、下地中、西辺中の順で学校経営のなかで手がけた様々な企画―経営実績だが、七章は教育行政の場で手がけた事業内容、八〜十章は、地元紙や県紙等の依頼での執筆、書籍等での紹介、講演や著書『たまうつ先生』『カツオ万歳』等の書評等を中心に構成されている。

B五判、三三五頁の部厚な内容のほとんどすべての頁に写真も掲載され、掲載紙誌名、年月日も明記されている。おそらく多くの人がふだんに新聞や雑誌の気に入った記事を切り抜きし、時折り取り出しては読み返したりするのであろう。しかし当初から三十余年このような出版を企図したわけでもなかろうが、きちんと整理、保存している例は少ないのではなかろうか。退職をきっかけに夢中に

なって「誰に相談することもなく一気呵成でこぎつけた」「思い出は宝物でもある。自らが大切にされた思い出なら、まさにオンリーワンの宝物である。ここに収めたすべての記事は、すべての人たちのオンリーワンの宝物だと信じている」（「あとがき」より）と記している。教職歴三十八年、とりわけ最後の校長職九年によって紡ぎだされた言葉であろう。改めてここに至る著者の労を多としたい。

なお表題の「すでぃがふぅ（巣出果報）」とは池間島方言の「ありがとう」との感謝の意の由。

（「宮古郷土史研究会会報」一六六号、二〇〇八・五・十五）

7．宮沢盛次・貞子「支え合って六十年」

二〇一二年に「二人三脚で五〇年」を刊行した平良・鏡原（地盛）出身の宮沢盛次・貞子ご夫妻があれから十年、このほど「支え合って六十年」を上梓された。

宮沢氏は鏡原小から旧制宮古中学校改め宮古高校を一九五二年三月卒業（四期）して、一九五六年三月、琉球大学経済学部を出て琉球銀行に入行し、定年まで四二年勤めている。貞子さんは平良は西里（羽立里）の出身。平一小から南中（北中と統合＝平良中）をへて、一九五四年三月宮古高校を卒業（六期）し、一九五六年三月琉球大学教育学部を終えて福嶺小を皮切りに、宮古と那覇で教職一筋に四〇年勤めている。お二人とも退職後も公私にわたってご多忙で、華麗な歩みのようである。

1．学校は陸軍病院

地盛は本来純農村で、宮沢氏もご多分にもれず、幼少期を農作業で過ごしている。一九四一（昭和十六）年四月、全国の小学校改め、鏡原国民学校に入学した年の十二月八日、太平洋戦争が始まった。四三年九月には鏡原校区一帯の大方は宅地・農地に至るまで強制接収されて、海軍飛行場（現宮古空港）が設営されている。三年生以上の児童まで作業に動員される。四四年中には三つの軍用飛行場を中心に宮古全域が軍事要塞化され、およそ三万余の陸海軍将兵が布陣し、鏡原校は陸軍病院に接収された。くわえて米・英軍の連日の無差別爆撃で、学校は休校同然となる。軍も民も物資の補給はなく、野良仕事もできない。衣・食ともに日々厳しい明け暮れである。

一九四五年八月一五日敗戦。宮沢盛次氏は五年生、貞子さんは四年生。四六年六月には国民学校は初等学校に改められ、高等科一年生は七年生、同二年生は八年生となって、翌四七年三月、旧制宮古中学校最後の受験生となっている。このため六年生から中学校に入った期は俗に「小学校を出なかった世代」とも言われている。

2．「宮沢文庫」

一九五六年三月、琉球銀行に入行した宮沢氏は、本部支店を振り出しに、松尾支店、本店調査部、普天間支店、浦添（副長）、再び松尾、本店保全課、同貸付課、沖縄飼料（株）出向、本店貸付課、寄宮支店（支店長）、大道、市場前、宮古をへて、本店営業部第三部長、同第二取締役部長、人材開発部取締役部長、営業第一取締役部長、りゅうぎんビジネスサービス（株）社長で一九九八年六月退職している。

在職中、一九八三年米国ハワイ州マウイ島親善訪問、一九八八年米国銀行視察、一九九七年オーストラリアを訪問している。

宮古支店長在職時、母校の鏡原小を訪問して図書室の「みすぼらしさにびっくり」、以来後輩たちに定期的に図書を贈り続けるようになり、退職後も続けて三一年間、三七五〇冊贈られている。同校では「宮沢文庫」として、児童の読書や学習に活用している。

貞子さんは一九五六年四月福嶺小から、平良第一小、那覇中、松川小、若狭小、真和志小、真嘉比小、再び松川小、若狭小、神原小で一九九六年三月定年退職している。その間、一九八八年には文部省派遣研究教員としてヨーロッパの教育事情を視察している。松川小在勤時は、「読書活動」の研究主任となり、同校に文部大臣賞をもたらしている。

在職中から「民話」の調査・研究を深め、退職後は「語り部」として小・中学校はじめ各地に招かれて講話し、「戦争と平和」についても講演して、二〇一二年の「慰霊の日」には宮古島市総合博物館で「忍び寄る戦禍を憂う」と題して講演している。二〇二〇年「平和の語り部」として県知事より感謝状。

3．「アミーチ混声合唱団」

お二人は退職後ほどなく混声合唱団「アミーチ」（男性二五・女性五〇）に所属し、二〇一六年三月一日東京なかのＺＥＲＯホールで催された「シニアコーラスＴＯＫＹＯフェスティバル」に出演して、二三合唱団のなかからみごと最優秀賞「厚生労働大臣賞」に輝いている。

元々「アミーチ」は一九九五年六月、二か月にわたる公民館講座の受講生によって「若狭合唱団」として発足したが、次第に人数が減り、しまいには男性一人、女性十二人、解散か続けるかまで落ち込んだが、団員を増やす努力をして三年後には「混声合唱団アミーチ」へ発展させたという。団長は宮沢氏で県内外はもとより海外公演まで成功させている。

お二人はオペラにも挑戦、「マクベス」「シモンボッカネグラ」「椿姫」等にも出演している。

4．俊秀ぞろいの宮高四期生

宮古高校卒業生で構成される南秀同窓会は旧制宮古中学創立以来、各期ともに俊秀ぞろいと評価されているが、とりわけ宮沢氏らの四期卒はきわだっているようだ。最年少は一九三四（昭和九）年四月二日～三五年四月一日生まれで、「小学校を出ていない世代である」。四期生こそが宮古人を代表する人びとの集団を自負し、天下国家を論じて「激論」もするが、粗相したとき「ジョウブン　キュウヤ　ピスガイヌ　ヨーイ　ヤーバ」（今日は広がりのお祝いだから…）と、とりなす「優しさ」を併せ持っているという（四木会（宮高四期生））。

それゆえであろう、卒業四五周年「われら昭和の端境期（一九九八年）、同六〇周年「それぞれの軌跡」（二〇一二年）、八五歳記念「爺々通信～友垣便り」（二〇一九年）と、三度も立派な記念誌を出している。内助の功（？）に輝く貞子さんは語り部としても数々の「民話集」を上梓し、盛次氏の三重県在住・同期生「医学博士　与那覇尚氏の軌跡」（二〇一七年）までだしている。瞠目するばかりである。

（「宮古郷土史研究会会報」二五三号、二〇二二・十一・十四）

8．『大世積綾舟』等の山内玄三郎氏

宮古の人頭税廃止運動をテーマにした『大世積綾舟～人頭税廃止と黒真珠に賭けた中村十作の生涯』の著者山内玄三郎氏が、八月三十一日午前、東京の病院で永眠されました。

山内氏は一九一九（大正八）年、城辺町字長間に生まれ、一九三九（昭和十四）年三月、県立宮古中学を卒業（七期）しています。同期に立津時男、兼島方信、奥平繁夫、北村伸治、源河朝明、西原一雄、富永裕夫氏ら。故人には平良弘志、宮国泰良、佐久田潤、伊舎堂弘、友利寛正氏らです。翌一九四〇年入隊、幹部候補生となって、一九四三年には東京陸軍少年飛行兵学校教官、一九四五年八月

敗戦時は大尉、中隊長。戦後は千葉県下志津原に入植、その後佐倉工業株式会社を興して社長。住まいは東京都中野区で、松子夫人（故砂川真修孫）と二人住まいでした。

一九七八年二月、『朝日新聞』の「会と催し」欄で、沖縄民権の会・連続講座の谷川健一氏「人頭税廃止、中村十作と宮古農民」を知って、会場への途次、書店で谷川著『沖縄―辺境の時間と空間』を購入して受講したのを機縁に谷川氏と面識を得るようになった（『大世積綾舟』自序―先生への手紙）ということです。それに触発されて五年余、中村十作ゆかりの人、土地の追跡が始まり、大著『大世積綾舟』は一九八三年十一月十七日言叢社（東京）から世に出ました。一九八七年十一月二十八日、平良市制四十周年記念・宮古人頭税廃止八十五年記念シンポジウムにはパネラーとして招かれています。このときのシンポジウムは、谷川健一記念講演、山本弘文基調報告があって、田里修、崎山直、砂川明芳、山内玄三郎の四氏が報告しましたが、山内報告は「中村十作と東京行動」でした。なお山内氏の現在確認できる範囲内の論文名を紹介して、ご冥福を祈ります。合掌。

中村十作奮戦記～板倉が生んだ偉大な先駆者（「広報いたくら」一九八四・七～八、二回）

近代宮古を築いた先覚者の一人「砂川真修」小論（「宮古毎日新聞」一九八五・九・五～八、四回）

宮古島近代史考～博愛碑序説（「宮古新報」一九九〇・一・一～二・五、二四回）

宮古島古代史論考（「宮古新報」一九九〇・四・九～二一、十二回）

宮古島歴史人物物語～友利の主物語（「宮古新報」一九九一・一・一～）

横内扶について（十作の妻夏子の父）（「平良市総合博物館紀要」一号、一九九四・三・三一）

（「宮古郷土史研究会会報」一二六号、二〇〇一・九・十三）

9．小説『島燃ゆ』の渡久山寛三氏

第五回平良好児賞を受賞した平良市東仲宗根出身の作家・渡久山寛三氏が本年九月十日、宜野湾市の病院で永眠された。享年八十九歳。

渡久山氏は一九一四（大正三）年一月十五日生れ。一九三三（昭和八）年三月、沖縄県師範学校を卒業、しばらく教職についたのち上京、日本大学経済学部に入学、在学中の一九四〇年「満州国」高等文官試験に合格。翌一九四一年三月卒業後は同国奉天省省長官房につとめ、四年後台湾総督府財務局へ転じている。敗戦で一九四六年帰郷、琉球銀行調査課長を一年つとめて琉球商工会議所専務理事二年をへて、「琉球政府」創設のための臨時中央政府に移り、琉球政府創設後は財務局主計課長、ついで会計検査院検査官を十年つとめている。その後は「極東放送」開設に参画、琉球キリスト教奉仕団の非常勤理事長となり、特別養護老人ホーム「愛の村」と「命の電話」の社会事業を展開している。

幼少のころから文筆に親しみ、師範学校時代は同期入学の故平良好児らと親交を結び、生涯を通じての友人であり、文学仲間を通した。本格的な執筆活動に入るのは戦後であるが、業務の関連で一九六七年には『沖縄企業診断実例集』、一九六九年には『沖縄経済の足あと』を上梓している。一九七三年『極限の沖縄戦』を刊行して、著述活動は本格化していく。一九七九年ひるぎ工房から『殉教者・本宮良の主～沖縄キリシタン殉教者・石垣永将』、一九八二年同じく

ひるぎ工房から『遙かな祖国』、一九八五年月刊沖縄社から『島燃ゆ～宮古島人頭税廃止運動』、一九九〇年新人物往来社（東京）から『琉球処分～探訪人・大湾朝功』を出している。いずれも一年内外県紙に連載してからの単行本出版であり、一九七〇年前後以後は執筆に明け暮れていたことを示している。

『島燃ゆ～』は表題どおり明治期宮古の人頭税廃止運動に題材をとったものだが、刊行当時、川満信一氏が「本書は、歴史事実に基づいた小説であり、当時の人頭税の実態や、国会請願に至る経緯、当時の風俗など、かなり記録に忠実に即しているが、登場人物の性格や、風貌などの描写は、もちろん聞き込みによって著者が創造したものである。それらの人物に与えた風貌や性格が、人頭税廃止という歴史的事件の総体を、より生き生きととらえるのに大きく役立っている。沖縄近代史の夜明けを理解するためにも、若い人たちや教育現場で読まれて欲しい一冊」（『沖縄タイムス』一九八五・六・三）と評したものである。また、砂川玄徳氏も「歴史の節目に、南海の孤島に燃えさかった民権運動の全容を理解するのに、この一冊ほど適切なテキストはない」（『琉球新報』一九八五・五・二二）と、評している。一九九三年十一月、宮古広域圏事務組合は同書を底本に新里堅進氏に託して劇画『島燃ゆ～宮古島人頭税物語』を刊行、小・中学校に配布している。

渡久山氏は多忙な著述活動の傍ら、日本ペングラブや日本エッセイストクラブ会員としての諸活動をはじめ、一九八二年には沖縄エッセイストクラブを設立して会長をつとめ、翌年十二月には合同エッセイ集『蒲葵』を発刊、以後毎月例会のほか毎年一回作品集を刊行して書き手の養成にも力を尽くしている。一九九二（平成四）年四月には那覇市文化協会設立に参画して、池原貞雄会長のもと、副会長をつとめている。個にとじこもることなく、社会的な広がりのなかにあって名利を求めるのでもない足跡は長く語りつがれることであろう。

二〇〇一年五月の第五回平良好児賞授賞式並びに祝賀会には体調すぐれず出席はかなわなかったが、今となっては同期生「好児」名の受賞は来世へのよきみやげになったのかも知れない。合掌。

（「宮古郷土史研究会会報」一三三号、二〇〇二・十一・二八）

10．文化行政に画期的な足跡・平良重信元平良市長

旧平良市の市長として今につづく文化行政に足跡を残した平良重信氏が七月二日午前一時五十五分、病気のため永眠しました。享年八十二歳。

平良氏は一九二八（昭和三）年七月十六日平良・西里の出身。県立宮古中学校から台北三中を四十六年三月卒業しています（宮中十五期）。帰郷後は商業や映画館を経営する傍ら、二十九歳で平良市議会議員一期、平良区教育委員（公選）一期をへて、六九年五月、平良市長に当選し、連続三期めの七八年六月、「政治献金」か「贈収賄」かの問題で辞任しています。

一九七二年「祖国復帰」にともなう新制度の整備で、予算、機構、陣容など各面にわたって急速に大型化するなかで、社会基盤の整備や福祉等に尽力しましたが、とくに七四年度に始まる文化行政はめざましいものでした。今につづく文化財保護を軌道にのせ、市民総合文化祭、市史編さん、宮古まつり、関東・関西ふるさとまつり、少年少女合唱団の結成もすべてこの年です。市民総合文化祭・文化講演部門の第一回は、戦後沖縄の歴史研究を精力的に先導していた沖縄歴史研究会の宮古出身・新里恵二弁護士を招いての講演でした。

文化協会は市民総合文化祭十年の歩みのなかで、市民各層の声を反映して設立されたものです。再起を期待されていただけに急逝が惜しまれています。合掌。

（「宮古郷土史研究会会報」一七三号、二〇〇九・七・九）

11．島尻出身の作家・評論家　新里金福氏

ことし二〇二一年は、島尻出身の作家・評論家として一九六〇～一九七〇年代に活躍した新里金福没三十年にあたる。

十歳で父を失い、母子家庭で小学校を卒えると、独学で教員検定試験をめざしていたが、戦中とあって軍隊に召集され、戦後は様々なバイトに明け暮れながら明治大学文芸科、さらに早稲田大学西洋哲学科を卒業した、世にいう苦学力行の士である。

著述活動に従事するなかで、積極的に民衆運動に関与し、とくに沖縄問題に集中して、十指に余る著書をはじめ、多くの論考を発表している。

1．与那覇春吉先生との出会い

島尻から徒歩で通っていた狩俣小学校高等科を卒えると、平良の医院や歯科医院に住み込んでいる。仕事の合い間に「文学書や思想書を手当たりしだいに読」み、「東京から中学校講義録まで取りよせて」熱心に詠んでいたために使用者からは敬遠されたようで、解雇され、あるいは退職している。当時は「半ば強制的に軍事訓練を主体とした」「国民皆兵をたてまえの戦時下の軍国教育の一翼」を担う「青年学校」が小学校に附設されていて、島尻から徒歩で通学していた。そこでのちに生涯の師と仰ぐことになる故与那覇春吉先生に出会う。春吉先生も家貧しく小学校卒業後は母校の給仕に始まって、独学で小学校訓導（教諭）の資格をとり、最後は校長から宮古連合区教育長、四十九年間教職についている。その間には、幼・小・中高校全職員を会員とする宮古教職員会長を十年も兼任している。周知の宮古を代表する立志伝中の教育者である。

2．民衆と共に生きる

春吉先生は金福少年に「ご自分の体験を語られ」「教員検定を目標に進むようにと、人生の指針を与えて」いる。それまで「ウックツした」日々であった金福少年は人生に「はじめて具体的な目標を獲得」したのである。

だが当時は男子は満十九歳になると、強制的に徴兵検査を受けて、軍隊（＝戦場）に入る義務があった。金福少年は教員検定試験の合格通知と前後して、軍隊（近衛連隊）への入隊が決定し、一九四三（昭和十八）年早春上京、敗戦までの二年余、宮城（きゅうじょう）（皇居）警備についている。

戦後はそのまま米軍の猛爆撃で焼け野原になった東京に居残り、一九四七年、明治大学文芸科に入り、三年後卒業すると早稲田大学哲学科三年に編入し、一九五二年卒業している。九年振り宮古に帰り、母や春吉先生に再会する。「郷里の人びとに会い、沖縄の現実をみるにつけ」「民衆と共に闘っていこうという決意」が高まり、再び上京した、という。中学で三年間教鞭をとったのち、創作と実践活動に専念することになる。

―以上は、与那覇春吉先生の「私の生活記録」（一九六九年）に寄稿した「都鳥～与那覇先生と私の出会」からの紹介である。

一九六〇年代は、新日本文学会幹事、アジア・アフリカ作家会議世話人を担当しながら、「沖縄月報」「沖縄評論」を主宰し、さらに「沖縄タイムス」「琉球新報」や東京の新聞に精力的に執筆している。

3．沖縄の歴史と現実、未来・・・

一九六三年一月帰県し、四か月にわたって県内各地をめぐり、五月帰京している。訪問した島十三、百余の史跡、三千余枚の写真、ノート二十二冊に記録している。これらを整理して、翌六四年二月、人物往来社から「歴史の旅　沖縄」を上梓している。巻頭に宮古をおいて、十四項からなる「目次」をみるだけで、「沖縄の歴史と現実と、それに未来をも含めた全体像」（あとがき）であることが納得できる。次のとおりである。

・宮古島～民族のふるさとを訪ねて　・本部半島～いまも語りつがれる為朝渡来伝説　・浦添～黄金宮と天女の伝説　・佐敷～琉球戦国時代の古戦場　・中城～護佐丸と阿麻和利死闘の跡　・久高島と伊是名～金丸王位継承の秘史　・八重山諸島～日本最南端の島に赤蜂の反乱　・名護～島津来襲の古戦場を行く　・奄美大島～今につたわる奴隷制度の哀史　・那覇と久米島～ペリー提督の沖縄来航　・守礼門～守礼の邦に渦巻く陰謀　・首里～琉球王朝崩壊の前夜　・ひめゆりの塔～太平洋戦争激闘の跡を行く。

4．宮古は「南海の宝島」

冒頭の「宮古島～民族のふるさとを訪ねて」は、柳田国男の「海上の道」、漲水御嶽にまつわる宮古旧記類の「天下り神話」、大神島や狩俣の「ウヤガン」、ドイツ商船遭難救助、「久松五勇士」などが概説され、末尾は、「宮古島」の「みやこ」は、「都」の「みやこ」に通じる、「宮古島は今も文字通り、南海の宝島といってよい」と結んでいる。

その後の著書は、「沖縄の思想」「沖縄解放闘争の未来像」「沖縄解放の思想と文化」「沖縄から天皇制を撃つ」「わが近衛聯隊記」ほか。共著に「沖縄の百年」全三巻、「天皇論」「三里塚」「日本史探訪・幕末琉球編」「第三世界と現代文明」ほか。

一九九一年五月二十三日没後、九三年一月「琉球王朝史」が刊行されている。二〇二二年「生誕百年」を迎える。

（「宮古郷土史研究会会報」二四三号、二〇二一・三・十五）

12．忠導氏正統18世仲宗根玄吉医博

九月二十五日は、大分県で永年精神科医として医療に従事する傍ら、各種社会活動で知られる宮古・東仲宗根に出自をもつ、仲宗根玄吉医学博士の三回忌である。

玄吉医師は、八重山とともに自立していたであろう宮古を、琉球王国に結びつけたと伝えられる仲宗根豊見親を元祖とする、忠導氏正統十八世の当主。沖縄県立第二中学校（現那覇高）をへて熊本医科大学を卒え、各地で医療に従事したのち、一九七二（昭和四十七）年大分県で精神科病院を開業、傍ら各種社会活動等に従事し、同県では広く知られた著名人である。

1．「陸士」から、東大へ

玄吉医師の父玄廣は宮古で生まれ、県立二中から中央大学法律科を卒えて沖縄県庁につとめ、母静は佐久田昌章の娘で、小学校教師。一九二八（昭和三）年那覇で生まれている。県立二中で四年を終えて一九四四年四月上京、予備校に通って陸軍士官学校航空科に合格、同年十一月入校した（陸士六十一期）。本来なら翌四十五年四月入校予定だが、「戦局悪化のため急きょ繰上げ入校」である。さらに「九月には航空士官学校に進む予定」であった。

八月十五日敗戦、九月一日解散式である。その後は大分県竹田市に疎開していた家族のもとに行き、隣県熊本の官立第五高等学校（五高）に入学している。陸士や海兵の在学証明を持つものは、全国ど

この高専でも入れるということのようだったが、五高には四百余が押しかけ、簡単な試験があって二十人だけ採用されたという。

二年後、沖縄学生寮が開設されて、同室には大浜方栄（のち医師、参院議員）、新里恵二（のち弁護士、沖縄歴史家）らがいた。

一九四八年、東京大学文学部に入学し、「専攻科」を決める目的もあって、「かたっぱしから有名教官の講義をきいた」、和辻哲郎、中野好夫、渡辺一人、森有正、中島健蔵、中村真一郎、富永惣一、相良守峯、手塚富雄、出隆、岩崎武雄、山崎正一、家永三郎、ほか…。まさに東大、今に伝わる錚々たる人士ばかりである（「でもしか」医者になるまで、一九九一年）。

2．柳田國男との出会い

東京では、沖縄学生寮の南灯寮に入ったが、のちに沖縄を代表する数多著名人が入寮していた。西銘順治、金城秀三、宮良作…ら。寮での学習会も活発で、外部からも講師を招くこともあったようで、日本民俗学の創始者として知られる柳田國男も招かれている。

友人の紹介で世田谷区成城の柳田國男邸にある日本民俗研究会に入会し、研究会に出席していたが、それが縁で、南灯寮で講演してもらったようだ。周知のように柳田は一九二一（大正十）年一月来県し、県立図書館長の伊波普猷と親しくまじわるとともに、宮古・八重山はじめ県内各地を視察している。宮古では玄吉医師の祖父玄純とも親しく面談している。帰京後「朝日新聞」に「海南小記」を連載し、のち刊行されたが、「ぶばかり石」など、宮古についてもくわしく紹介している。

玄吉医師は柳田の印象について、「沖縄のすみからすみまでなんでも知っていることに、ただ感歎するばかりであった」と記している（前掲「でもしか」医者―）。

3．多彩な社会活動

玄吉医師は医療法人「とよみ会」仲宗根病院理事長・院長として、日本精神医学会、日本刑法学会、九州法学会等にも所属し、「明治政府によるドイツの法学および医学の採用」など、多くの著書・論考を著わしている。「精神病理学からみた日本刑法の問題点」をテーマにした著書は日本医師会の最高優功賞を受賞（一九八一年）し、一九九四年には日本心理学会賞を受賞している。二中、東大で同学だった幸地成憲琉大教授（法律）は、玄吉医師について「臨床学で地方に閉じ込めるには惜しい人材で、中央で学者の道を歩むべき人だった」と語っていたという（山川岩美「琉球新報」一九九九・十一・一八）。

三十年近く前になろうか、九州地区の教職員共済会理事長の研修会が那覇で開かれたとき、宮古・八重山の視察も日程に入っていた。宮古では共和ホテルであったか、請われて「宮古の歴史」を紹介したが、席上、大分県の理事長から「うちのナカソネ先生とは関係がおありでしょうか」と問われたことがある。大分県では社会党県連の顧問もつとめているということであった。

さきの山川岩美氏によれば玄吉医師は趣味も広く、日本棋院大分県本部長（七段）で、職域野球では、仲宗根病院チームは九州地区では優勝、国体では準優勝の戦歴だという（前掲紙）。大分県沖縄県人会長もつとめ、病院の職員も沖縄県出身者を多く採用し、郷友のめんどうみもよかったようである。

4．宮古への提言

一九八〇年前後、旧平良市で「文化広報」を担当していたころ、県外で活躍する宮古出身者に「ふるさと讃歌」の表題で毎月一回宮

古への提言を連載したことがある。新里金福、新里博、奥平繁夫、金井喜久子、佐久田昌一、下地恵常、下地玄信、砂川恵弘、砂川玄俊、友利明長、宮国泰治、宮原昌茂ら・・・、三十余人に登場してもらった。

そのとき玄吉医師は「美しい海を生かして観光客を大々的に誘致することが第一」と提起し、海水浴場の整備、水族館やいるか演技場の開設、熱帯植物園の充実等を提言している（「広報ひらら」二〇一号、一九八二年）。同家に伝わる数々の史・資料、道具等は宮古島市総合博物館に寄託され、大方は公開されている。

父玄廣は「沖縄戦」では知事官房主事として島田叡知事と行を共にし、摩文仁で殉職したと伝えられている。

（「宮古郷土史研究会会報」二四六号、二〇二一・九・十三）

おわりに

もっとも知識を吸収するであろう旁感な時期に、宮古出身者はおろか県出身者も一人も居ない南九州に戦時疎開し、引きつづき戦後も滞在していた（一九四四・八～五六・四）。十二年振り帰郷したとき、まさに今浦島、方言は聞くことも、しゃべることもまったくできず、宮古については呆れるばかりの無知そのものであった。

一九五七（昭和三十二）年十月、地元新聞社（「宮古毎日」・「日刊南沖縄」）につとめて六年半、取材をとおして宮古を知るための史資料をあさり、様々な人に会って話を聞くことに専念した。にわか仕込みの知識であったろうに、評価してくれる先輩方がいて、請われるままに一九六四年七月、宮古教職員会（現沖教組宮古支部）に移り、機関紙中心の情宣活動に十年従事した。その間、大神・水納をふくむ宮古内小・中・高校の大方を幾度となく訪問している。

さらに再度請われるままに一九七四年四月、旧平良市教育委員会に移り、文化財保護や市史編さん、市民総合文化祭等を担当した。そこでもよき上司、よき同僚らにめぐまれ、引きつづき文化広報、社会教育、総合博物館、総務部企画室等まで二十一年つとめ、一九九五年三月定年退職した。

一九五七年十月、宮古での社会人としての出発以来、教えを乞い、あるいは知遇を得た県内外の先学諸兄姉に頂いた図書・論考はじめ、必要にせまられて購入した宮古関係図書を中心に紹介したのが一定量になっていたので一部整理して「宮古圏域の図書・論考をたずねて」としたのである。

前にも記したことだが、児童文学者の友利昭子さん（もりおみずき）や「んきゃーん塾」を主宰する佐渡山政子さん（さどやま彩）らは、かつて老朽化した宮古琉米文化会館以来の市立図書館を壊して別の場所での新館建設が公表されたとき、旧館は壊さず一定ていど整備して「文学館」としての再利用を提唱したが、当時の市当局の入れるところとならず取り壊されてしまった。一時的にもせよ「文学館」としての実績を積むことで、将来の本格的な文学館建設に備えようとの構想ではなかったろうか。今も千載一遇の機会を失ったとの思いをかこっている一人である。

年は旁少うしろであろうが、表現活動では断然先を行く児童文学者として内外に知られる友利昭子さんや地元紙等に「文学碑」等を連載し、民話の調査・研究でも広く知られる佐渡山政子さんらをはじめ、麻姑山俳句会などの俳句サークルは一九七四年以来、市民総合文化祭文芸展や「篠原凰作の世界展」開催などでも実績を重ねており、宮古には表現活動では周知の方々が数旁くおられる。前編で

のべ六五人、補遺で五二人、合わせてのべ一一七人紹介している。それでも全体からみればおそらく一部に過ぎないであろう。

医師で歌人としても著名な宮国泰誠先生（一九一五～九二）についても紹介していない。先生は昭和初期、創立間もない旧制宮古中学で教鞭をとられた、「無季句の旗手」とうたわれる鹿児島県出身の篠原凰作（國堅）によって詩歌にめざめた教え子の一人である。戦後は一九七〇年の「歌会始め」で入選（「見わたせば甘蔗のをばなの出揃ひて雲海のごとく島をおほへり」（一九七五年「歌碑」建立）して以来、作歌にも精進し、夛くの著書を公刊しておられる。

「歌集　雲海」（一九七五年）、「昼となく夜となく」（一九七九年）、「現代短歌にみる医師像」（一九八一年）、日本現代歌人叢書第九十八集「宮国泰誠歌集～摩文仁」（一九八七年）、「健康に関する二二〇のメモ」（一九八八年）、現代短歌文庫二十四集「夕あかね雲」（一九九〇年）、「名歌にみる日本の恋」（一九九一年）などが知られている。

公私ともに何かとご指導頂いた宮国先生についてもふれていないことを気にやむことしきり…。さりとてもはや残された時間は限られてきており、これからよみ深めるには厳しいものがあるようだ。「宮古圏域の著者・論考をたずねて」は、一応これで終わりにするしかなさそうである。